

白門経友会

多摩キャンパスは、
桜が満開で新年度を
迎えております

三月二十五日に卒業式が挙行され、経済学部では約一千名の学生を世に送り出しました。卒業生の皆さんの今後の活躍を期待したいと思います。

今春都心では桜の開花が早かったのですが、多摩キャンパスで入学式が挙行された四月二日は残念ながら三分咲きでした。経済学部では本年約一千名の新入生を迎え、式では在校生を代表して経済学部四年生の山下さんが歓迎の辞を述べました。
新学期的の授業やイベントなども順調に進んでおり、新入生もキャンパスの施設や環境にも慣れて学業に励んでおります。



卒業式当日(事務室)



証書授与(学部教室)



(テミス像付近)



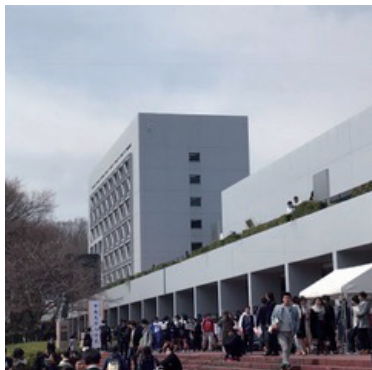
卒業式会場(第一体育館)



卒業謝恩会(ヒルトップ'78)



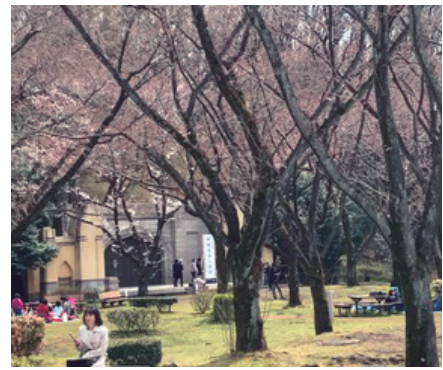
卒業謝恩会(ヒルトップ'78)



入学式当日(ヒルトップ前)



入学式当日(白門プロムナード)



入学式当日(桜広場)

アジアの経済回廊と グリーン経済

名誉教授 緒方 俊雄



第三回(本稿は二〇一四年六月の記念講演からの抜粋です。)

マーシャルの視点に従うと、私もオダムという生態学者から学んだわけです。オダムの名著『生態学の基礎』には、彼の論点を明確にするために生態系の循環図が掲載されています。これは、最初に太陽光による光合成を通じて植物が「生産」されるところで、太陽光からのエネルギーを吸収した量が示されています。次に、その植物が草食動物によって食べられる。「消費」です。その時のエネルギー量が示されています。さらに肉食動物によって食べられる。食物連鎖の過程を通じて、だんだんエネルギー量が低下してゆくのが分かります。「熱力学の法則」を生物学に応用したものです。私はこれを重要な論点と思い「オダムの法則」と名付けました。これまで、この法則に

気づいた経済学者はおりません。

この「オダムの法則」を経済学にあてはめるとどうなるかというところからいこうとします。いまベジタリアンのように穀物だけを食べる(消費)生活を考えてみます。おコメのご飯とおイモや大根の煮物、漬物です。私の母は山形出身で、そうした食生活を楽しんで、96歳まで生きました。長生きの秘訣かもしれません。次に

穀物や野菜をニワトリの餌にして、その鶏肉を食べるとします。その鶏肉1kgを育てるのにどれくらいの餌が必要でしょうか。オダムは平均して約4kgの餌を必要とするということです。そのためには餌用の農地が必要で、私も小学生の時に鶏を飼っていました。餌として、裏庭には小松菜やトウモロコシを植えて世話をした思い出があります。次に、豚肉を食べるとしましょう。オダムによると、家族で豚肉1kgを食べるとすると、豚肉1kgを育てるために7倍の餌が必要になるということです。さらに、肉食家族が牛肉(ビーフステーキ)を食べるとすると、その餌に11倍の穀物飼料をあげないといけないそうです。もはや私の庭では不可能です。食物連鎖の過程で太陽から吸収したエネルギーが次第に低下する

からです。「オダムの法則」の含意は、肉食化が地球規模で広がると、穀物の高騰と穀物を生産する場所がなくなる、農地拡大のために森林(二酸化炭素の吸収源)の伐採がさらに進むということになります。

しかし、現在の市場経済では、この生態系の法則を正しく評価していません。なぜなら、20世紀型の現状維持(BAU)であれば、例えば中国が今後ますます経済水準を高め、肉食化が進行してゆきます。北京でも上海でもハンバーグ店やステーキハウスが行列ができています。その結果、どうなるかです。今の食糧生産体制では、肉食化した地球人口を賄いきれなくなります。悲惨な食糧争奪戦が起こるかもしれません。だから世界文化遺産に選ばれた日本の和食というライフスタイルが世界から注目されるわけです。それだけではありません。先ほどの生産関数ですが、肉食という投入は、体内でこのエネルギーやカリウムとして吸収されると肥満に繋がり、健康問題を引き起こしています。その意味でも、肉食化ではなく、健全な食物連鎖と両立する食生活(食育)を考えるべきなのです。

ケンブリッジの伝統として、

シューマッハーの『スモールイズビューティフル』も調べてみると、21世紀型経済に多くのヒントを与えてくれます。彼は若いころにイギリスのケンブリッジ大学に留学し、ケインズの秘書をしていました。最近

二〇〇八年の金融危機に直面して国際金融制度の再検討が行われ、ケインズの「バンコール(超国家的通貨)」が再評価されています。一九四〇年代のケインズの『国際清算同盟案』はもともとシューマッハーの草稿が起源です。その後、彼は、インドやバングラデッシュに行つて、仏教の生活様式を経験したときに、「仏教経済学」の構想を展開しています。仏教的な「足るを知る」という「中庸」の思想を学ぶことにより、大量生産・大量消費・大量廃棄の経済のあり方を見直して、『スモールイズビューティフル』を公刊し、エネルギー問題や環境問題の解決に一石を投じました。シューマッハーが亡くなった時に「シューマッハー財団」が組織され、同研究所から「シューマッハー叢書」を出版しています。その中の12巻目、私が協力者を得て翻訳したのが『世界のエコビレッジ：持続可能性の新しいフロンティア』(二〇一〇年)です。この本を翻訳し

ながら、「エコビレッジ」(Ecovillage): 生態村」のあり方を学びました。個人主義的な合理的経済人とは違ったやり方、ライフスタイルの作り方、お互いに欲をもたずに、あるいはお互いに助け合うというライフスタイルです。オール電化のために原発に頼るのではなく、もつと自然エネルギーを活用し、経済的・社会的・文明的な持続可能な社会を作るためのライフスタイルをデザインする。そのために、コミュニティの社会的共通資本や社会関係資本(信頼関係)をうまくデザインする上で重要な示唆を与えています。

国連では、これをベースにしてエデュケーション・デザイン教育(EDDE)を推奨しています。渋谷にある国連大学では、里山教育とか里山保全を推進し、生物多様性を議論する国連会議(名古屋)では「里山イニシアチブ」が提案されました。「里山(Satoyama)」を象徴するのは「グリーン(Green)」です。国連では、20世紀型の公書を象徴する「ブラウン(Brown)経済」と対比して、地球の緑化を「Green Economy」と呼ぶようになってきます。

事実、国連環境計画(UNEP)は、二〇一一年「Towards a Green

Economy: Pathways to Sustainable Development and Poverty Eradication(『グリーン経済に向けて: 持続可能な開発と貧困廃絶への道』)を発表しています。本書では、グリーン経済について「二酸化炭素を減らし、エネルギーと天然資源の利用効率を高め、生態系サービスや生物多様性を損なわないように人々の所得や雇用の増加をめざす経済」と見なし、「資源の枯渇や二酸化炭素を大量に排出するブラウン経済が内包する危機を引き起こさないためには、世界のGDPの2%を効率よく投資に向けて利用効率が高いグリーン経済に向けて世界経済を移行させることができる」と提言しています。グリーン経済の主役は「自然資本」であり、農業・林業・漁業などの第一次産業です。本書のいくつかの章を見てみる

と、Investing in Natural Capital は、自然資本に資金を向ける問題であり、具体的に農業(Agriculture)の近代化、自然と調和するような投資を増やし、また漁業(Fisheries)では海洋保護区を設けて海洋資源を保護育成し、さらに森林(Forest)では世界の森林は伐採で猛烈な勢いで減少しているため、REDD(森林減少・劣

化からの温室効果ガス排出削減)スキームを通じて森林減少を止め、植林や造林を通じて緑化を広めるために補助や投資をもつと増やすように提言しています。

Investing in Energy and Resource Efficiencyでは、再生可能エネルギー(Renewable Energy)である風力、太陽光などの自然エネルギーをもつと有効活用しよう。廃棄物(Waste)を減らそう。Reduce、またなるべく再利用する。Reuse、あるいはもう一度資源にする。Recycle、つまり「3R運動」を提言しています。それから、観光もMass tourismではなく、カーボン・オフセット制度などを組み込んだEcotourismの拡大が目されています。最後にSupporting the Transition to a Global Green Economyでは、世界のグリーン化への「トランジション(移行)」を「コンパクト・シティ」や公共交通機関の活用する「モーダルシフト」を通じて実施するための、いわば制度設計と支援体制の整備が議論されています。

先程もご紹介したように、私は、二〇〇〇年頃からアジアのフィールド調査を実施してきました。今日この経友会にご参加いただいている山

本幹雄さんには中国でお世話になりました。カンボジアでも中大OBの方にお世話になりました。ベトナムでは、中央大学で博士学位を授与されているトウイ教授に現地調査をサポートしてもらいました。「社会関係資本」です。そして、二〇一〇年に中央大学創立125周年の国際シンポジウムを開催しました。私が組織委員になって、国際交流協定校のハノイ国民経済大学(NED)で開催し、後日議事録を「Bioregionalism and Ecovillages」としてヒルトップ出版から発表しております。このBioregionalismは、「bio(バイオ=生命)」と「regionalism(地域主義)」の合成語で、グローバル化に對して、生態系は政治的な環境では区切れず、生態学的・地理的環境を尊重した地域共生社会を意味します。「Ecovillage(生態村)」も行政単位の村ではなく、里山などの環境保全のコミュニティ(共同社会)を意味しています。ここでは、戦争目的だったホーチミンルートや「緑の経済回廊」にしたいというメッセージを込めたものです。当日は、ベトナムのテレビ局も取材に来て、後日放送されたそうです。(次号に続く)

え、あの先生がシリーズ②④

経済学部助教 中谷 康司



二〇一四年四月に着任しました中谷康司(なかにたに やすし)と申します。経済学部では保健体育の実技・講義・ゼミを担当しております。前任校(東邦大学)では医学部の基礎医学講座(生理学講座)に所属し、約十二年間、医師を目指す学生に専門教育を行ってまいりました。従いまして、非常勤講師として保健体育の実技・講義などは担当しておりましたが、中央大学への赴任は別カテゴリーへの転身ということになります。

しかし、転身は今回に始まったことではありません。元々は中央大学附属高校、中央大学ともに文系でしたので、医学部の教員になるまでには大学院への進学でも大きな転身を経験しております。大学時代はほとんどを第一体育館で過ごすタイプの学生でした。これは法学部の宮本知次教授の「空手・ヨイガ」という講義を履修したことに始まります。球技が得意でない私にとつ

て、必修科目の中で履修したいと思える数少ない科目でした。実技の示範も素晴らしいものでしたが、一つ一つの所作・動作に亘るまで、その所以についての理論的・合理的な説明はまさに圧巻でした。大学にはこんな授業があつて、こんなことまで明快に教えてくれるのか!とえらく感動したものでした。また、その周りに履修を越えて集まってもらえる先輩方も大変魅力的で、司法試験の勉強もそこそこに、空手三味の日々に入りました。今思うとこれも転身だったのかもしれませんが(笑)。

進路を考える時期になりました、段々と自分も大学でこういう講義をしてみたいという思いが強くなり、一方で、自分のやっている空手やヨイガ、太極拳といった東洋系の身体技法によって心や体の状態が変わるのはなぜなんだろう?という、あまり師匠が触れない部分に興味に向くようになりました。そして、師匠の薦めもあつて卒業研究でもするようなつもりで色々調べてみたのです。すると意外と科学的にはわかっているということが分かりました。それなら、自分が調べてみよう!と、当時、ご近所の東京都立大学大学院理学研究科に開設されたばかりの身体運動科学を専攻する理系大学院への

進学を思い立ったのです。流石に、この突拍子もない転身は難しく、一年間の研究生を経て、猛勉強の末、何とか院試に合格、稽古三昧から一転、実験・解析・発表、時々稽古の生活に変化しました。さらに続くもので、在学中、東邦大学の有田秀穂先生が「坐禅の効用をセロトニン神経の活動変化から証明する」というプロジェクトを立ち上げたことを同級生から聞き、やりたいと思っていた研究はこれだ!と、導かれるように博士課程、そのまま就職とそちら方面の道を突き進むことになったわけですね。

さて、今回、母校の経済学部からご縁をいただきまして、大学時代に志した教鞭の道へ戻ることができました。思えば、自分自身の興味に従って、突き進んできたように思います。現在、ゼミも担当させていただいておりますので、このリサーチマインドはぜひともゼミ生に継承していきたいものであります。また、医学は病気の治癒を目指しますが、東洋的な世界では治療よりも病気にならないことが最上であります。そういった意味で健康教育に携われることは非常に意義深いことだと捉えています。

母校では腰を据え、後輩たちへの指導に専心するとともに、社会に貢献できる自分らしい研究成果を構築して行ければと思っております。

編集後記

春は別れと出会いの季節です。

昨年度末をもって退任された専任教員は以下の通りです。長年にわたる経済学部への尽力に感謝いたします。

市川泰男 教授(英語)

塩見英治 教授(交通経済論)

中野 守 教授(経済政策論)

成田 浩 特任教授(インターンシップ)

森 朋也 任期制助教(特別講義)

そして、本年度は三名の新任専任教員を迎えることとなりました。

中川康弘 准教授(日本語)

村上弘毅 助教(基礎マクロ経済学)

吉見大洋 准教授(国際金融論)

九月着任予定)

本学の教育研究の発展に寄与していただくことを期待してやみません。

(幹事長 濱岡 剛)

2017年4月3日 第64号
発行 白門経友会常任幹事会
編集 白門経友会編集委員会
〒192-0393
東京都八王子市東中野742-1
中央大学経済学部内
URL: www.wg-keiyukai.com
Fax: 042-673-3425